

造山古墳群の謎にせまる

岡山市教育委員会文化財課

原田悠希

○はじめに

造山古墳群は岡山市北区新庄下から千足地域にかけて展開する古墳時代中期の古墳群です。主墳の造山古墳は全長 350m の前方後円墳で全国第 4 位であり、古くから全国的にも著名でした。1990 年代に入って初めて古墳群の正式な調査が行われ、以後、岡山市教育委員会を中心に継続的な調査が行われました。本鋼材では発掘調査の成果を中心に、造山古墳群の謎にせまります。

1 造山古墳群の概略

○基本情報

- ・ 5 世紀初頭から中葉にかけて造山古墳を起点に 6 基の古墳で構成される
- ・ 南からのびる丘陵を利用して築造（古墳のすべてを盛土しているわけではない）
- ・ 古墳群の北側は現在田んぼが広がっているが、旧来は湿地が広がっていた
- ・ 千足古墳と第 6 古墳の間を古代山陽道が通る（築造当時は「山陽道」の概念はない）
- ・ 造山古墳：前方後円墳、第 4、第 5（千足）古墳：帆立貝形前方後円墳、第 2 古墳：方墳
第 1（禰山）、第 3、第 6 古墳：円墳 ※墳形が確定しているのは造山古墳と千足古墳のみ

○研究略史

- ・ 大正時代

造山古墳前方部の石棺や千足古墳の石障が報告され全国的にも著名に

→大正 10 年に史跡指定

- ・ 昭和時代後半

より詳細な測量図の作成や

出土した石室石材の分析が進む



図 1 造山古墳群全体図

平成時代～

- ・第4古墳を皮切りに継続的な発掘調査が行われる
- 表採遺物ではなく、発掘調査で出土した遺物で研究ができる
- 耕作や腐葉土等がのった地面ではなく当時の古墳の形が判明する
- ⇒より詳細な研究、検討が可能に

○令和時代

- ・Lidar 搭載のドローンを使用したより詳細な地形図の作成
- ・ミュオンや地中レーダーなどを使用した非破壊による石室の推定
- ⇒科学技術の発展に伴う、さまざまな方法で謎にせまれるように

2.千足古墳について

○概要

- ・1912年 榊山古墳とともに発掘される
- 石室内から遺物を取り出される（一部は現在、宮内庁が保管）
- ⇒1919年に遺物とともに、石室内にある石障に直弧文が刻まれていることが報告され、一躍著名な古墳となる
- ・2009年 石室内に溜まった水を抜いたところ石障の一部が剥落していることが判明
- ⇒緊急事態として発掘調査後、取り上げ（現在、埋蔵文化財センターで保管）

○発掘調査でわかったこと

【墳丘】

- ・全長 81m、前方部1段、後円部3段の帆立貝形（帆立貝形としては県内で2番目の大きさ）
- ・前方部の周囲には一部周溝がめぐる
- ・墳丘には本来埴輪列が存在
- ↑周溝から多くの埴輪片が出土
- ・円筒、朝顔、鞍、盾、甲冑、家形埴輪
- 多種多様な埴輪の構成

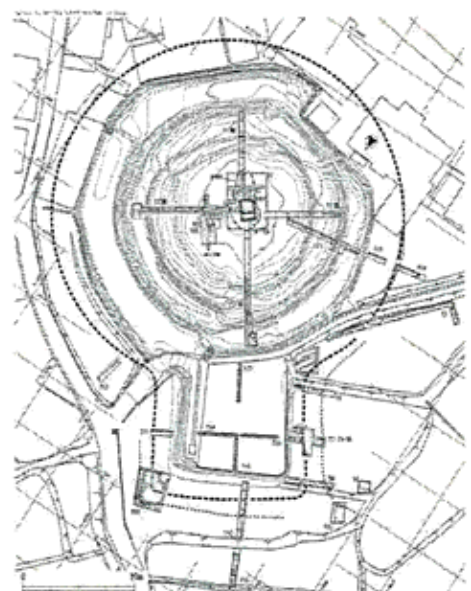


図2 千足古墳平面図

【石室】

- ・ 1912年の発掘によって石室の蓋が動かされている
 → 間から雨水が浸入し、結果的に石障にダメージ
- ・ ドーム型の天井を持つ横穴式石室（横穴式石室としては県内最古例）
 玄室の中に石障（直弧文をもつ事例は本州では千足古墳だけ）
 石障は天草産の砂岩を使用（やわらかく加工しやすい⇨もろく壊れやすい）
 ⇒ 石室の構造や直弧文は九州地方特有&天草産の石材を使用
 石室の側壁や天井石は香川県五色台産の安山岩を使用

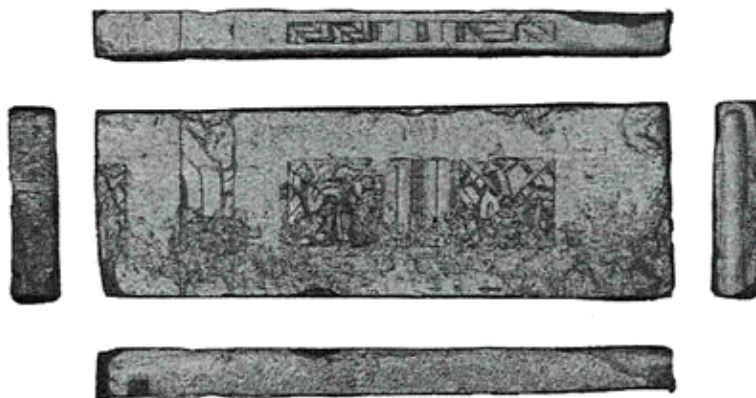
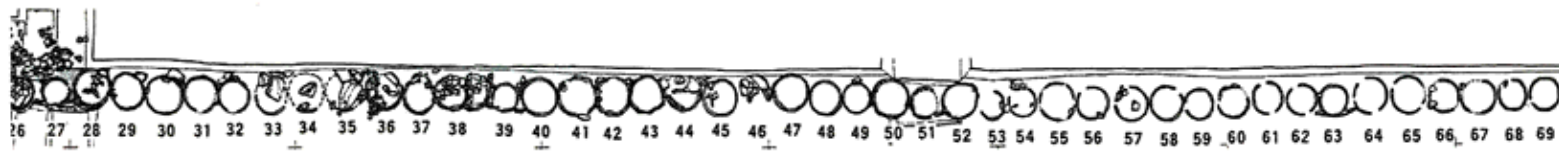
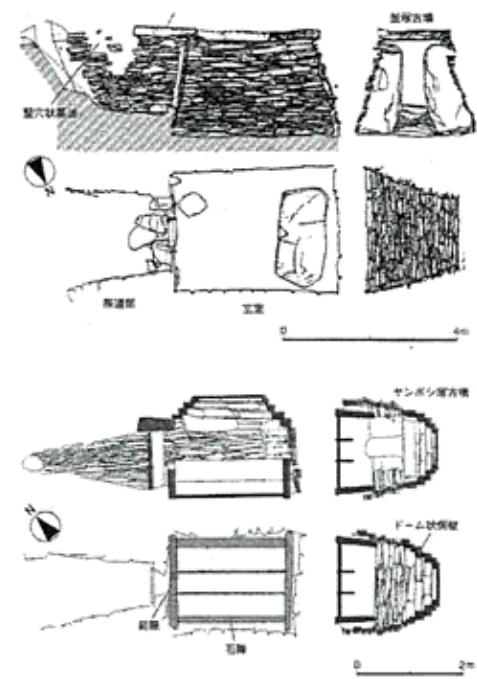
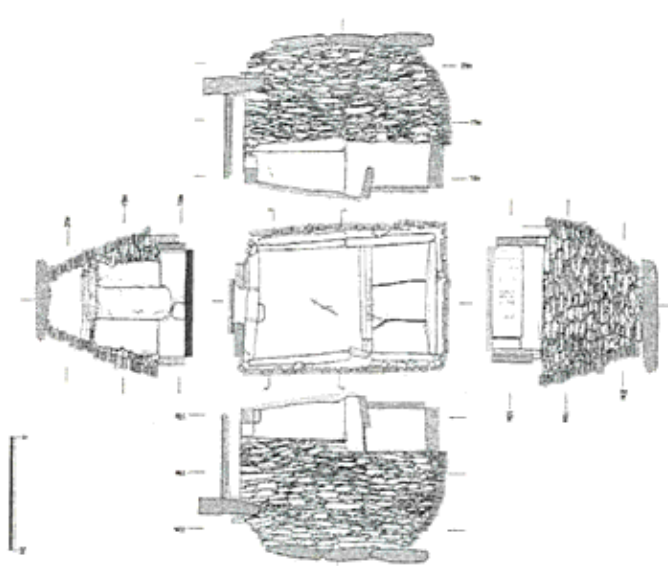


図3 上：千足古墳石障
 左：千足古墳玄室
 右：九州の事例



3. 第2古墳について

- ・造山古墳群で最後に築造された古墳
- ・古墳群内で唯一方墳をとる（調査の結果、造り出し状の遺構が伴う）
- ・古墳の周囲に周溝がめぐり、その外側には周堤、埴輪列、周溝状遺構がめぐる
⇒周溝状遺構まで含めると長さ70m、幅50m程度の墓域になる
- ・円筒、朝顔、盾、冑付盾形埴輪、蓋形埴輪が出土（蓋形埴輪は墳丘側のみ？）
- ・冑付盾形埴輪は県内で唯一、5世紀中葉では全国的にみても珍しい例
- ・石室は不明ながらも周囲で香川県産と考えられる安山岩が採集されている

⇒古墳群最後の築造とは思えないほど、手の込んだ古墳

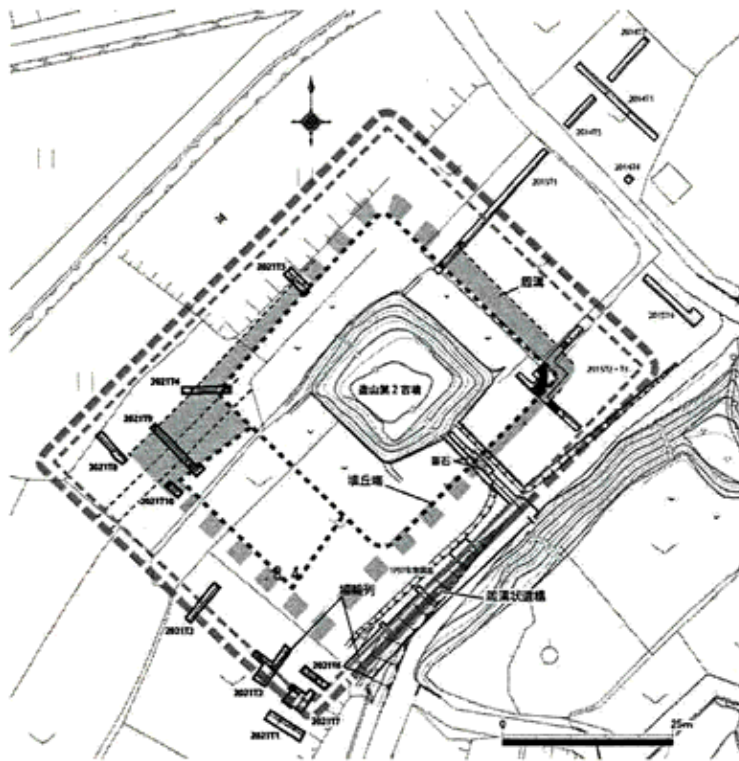
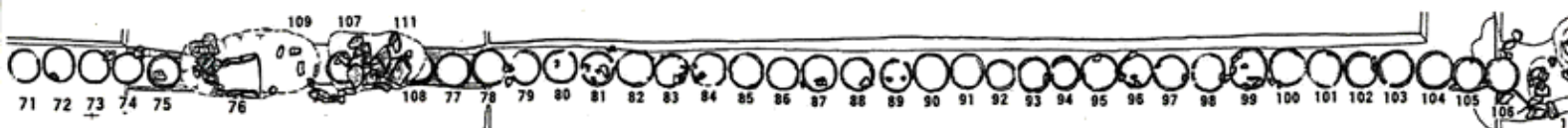


図4 左：第2古墳復元慮 右：冑付盾形埴輪

図5 第2古墳東側埴輪列



4. 造山古墳について

- ・2016年から継続的に調査
 - 300m級の古墳では全国で唯一墳丘の調査
- ・墳丘の西側を中心に調査
 - 前方部端の検出、1・2段目で埴輪列、各所で斜面の葺石を検出
 - ⇒今まで謎だった巨大古墳の構造や埴輪の配置方法などが明らかに！
 - ⇒調査のできない陵墓の復元や研究の基準になる

【前方部西側】

- ・墳丘の端っこを検出
 - 基底石は大きめの石を、斜面は少し小ぶりの石材を使用して葺いている
 - 基底石=周溝の始まりとはならない



図6 前方部西側 (2019T3) 平面図

【後円部】

- ・墳丘の端は削平により失われている
- ・テラスでは外寄りに埴輪列が並び（幅2mで5本の間隔）、テラス幅はおおよそ6m
 - 埴輪列の検出は造山古墳では初であり、一部では全体が復元できるものがある
- ・黒斑（野焼きの際に埴輪表面に付着する）をもつ個体が多い
- ・埴輪の据え方は場所によって、個別に設置、墳丘を造りながら設置など場所によって様々
 - 葺石も石材の選択、設置方法は場所によって異なる
 - ⇒築造に関して異なる方法を持つ複数の集団（工人）が関与か？

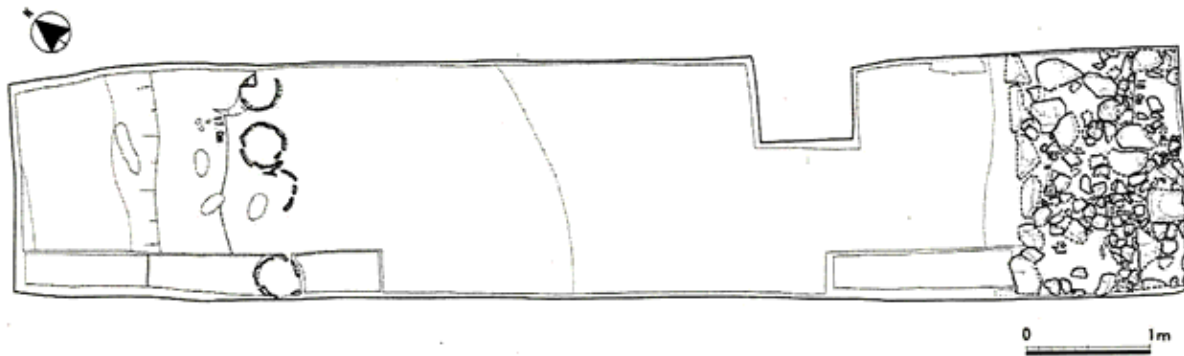


図6 後円部第2段テラス (2020T2) 平面図

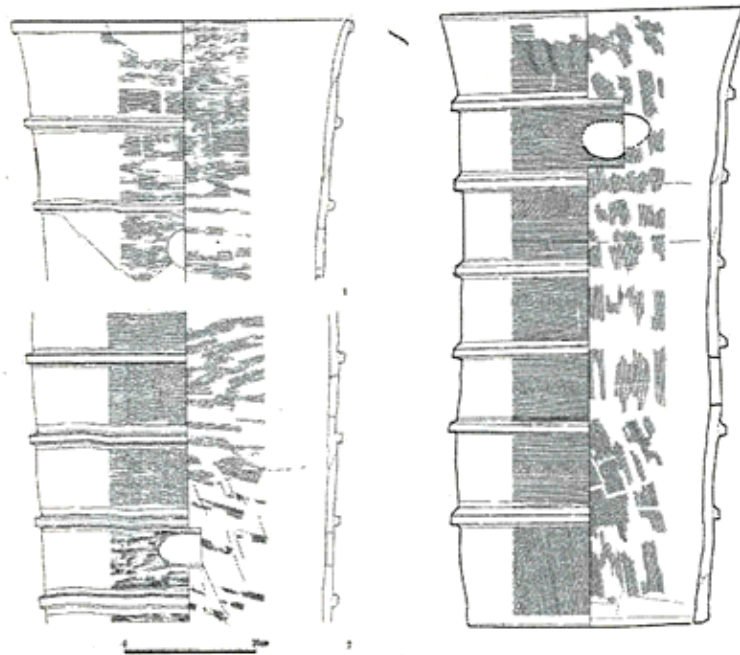


図7 造山古墳出土埴輪

左：大型円筒埴輪

右：2020T4出土埴輪

【後円部墳頂】

- ・令和4年度に調査
- ・古墳が造られた後に数度にわたって、人々の活動の痕跡がのこる
 - 中世初期や戦国期などに柱を伴う建物、戦国期の土塁や曲輪
 - ⇒墳頂周辺の残りはあまりよくない
- ・墳頂中心部付近で6枚の安山岩を検出
 - 香川県産の安山岩であり、列状に並んでいる
 - ⇒造山古墳の石室に関係するか（判断材料が少なく、可能性は様々）
 - ⇒石室の側壁、控え積み部分、方形壇上遺構の石列、後世の積みなおし etc...

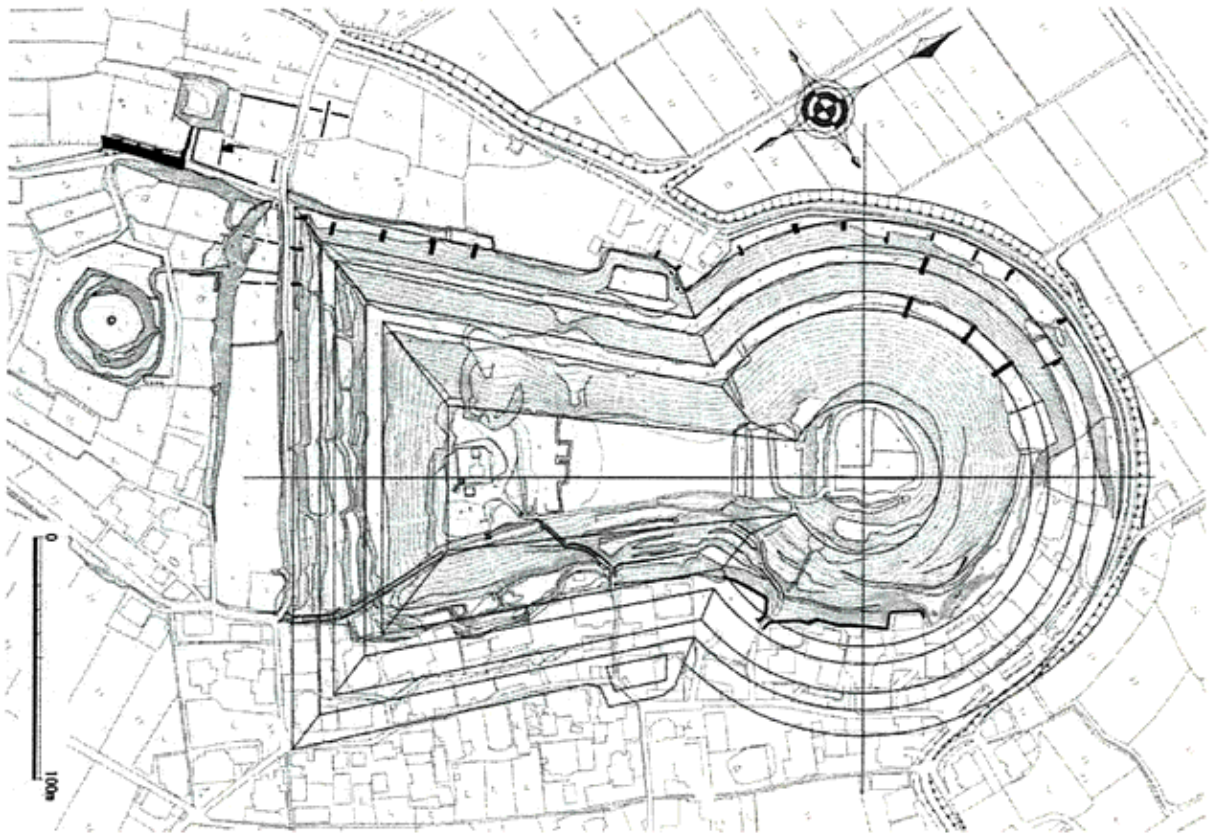


図8 造山古墳復元図

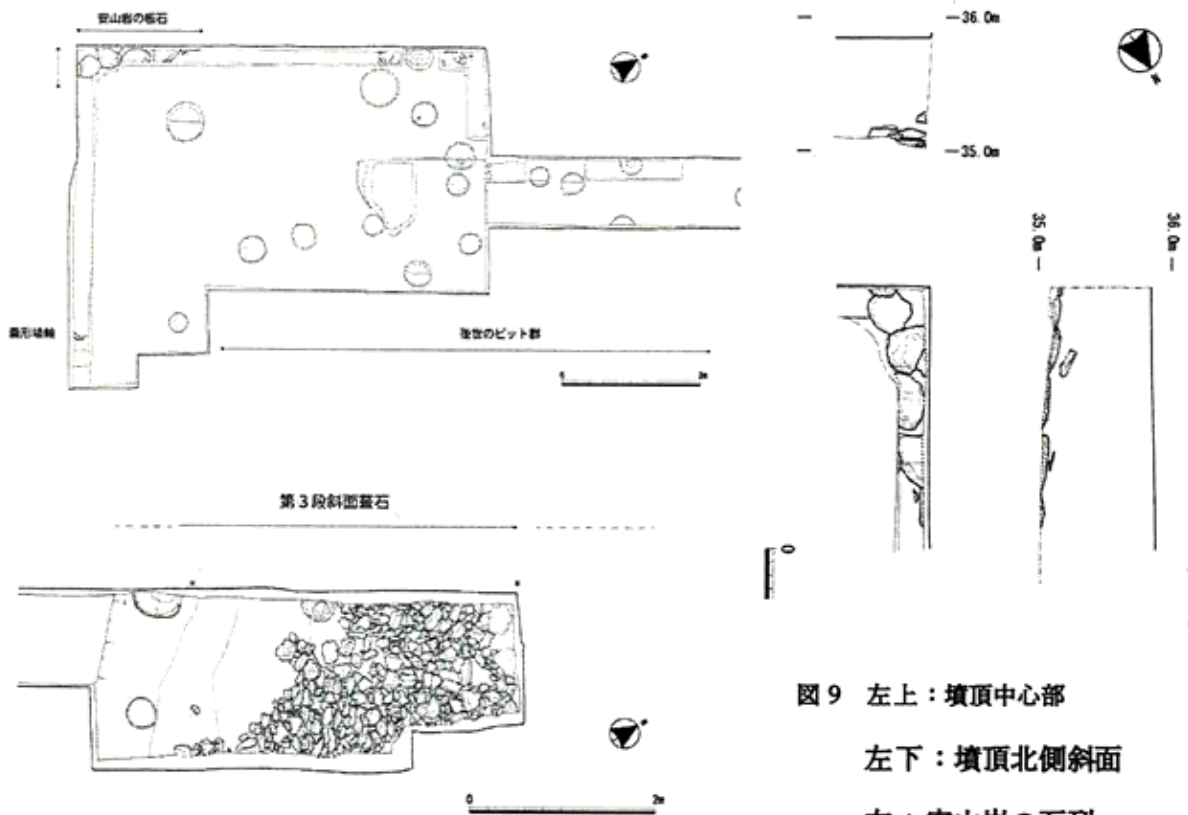


図9 左上：墳頂中心部
左下：墳頂北側斜面
右：安山岩の石列

